

古河公方と関東管領

享徳の乱—1455年

享徳の乱では、関東公方足利成氏が古河に移り(古河公方)、関東管領上杉氏と対します。

その争いの中に崎西郡を舞台として争う場面がありますが、これが騎西城とされます。

この時期に騎西城の前線基地としての重要性は格段に高まり、戦闘の拠点としての城の整備がされたものと思われます。



古河歴史博物館『古河公方展』より作成

上杉謙信と北条氏

永禄・天正期の軍事的緊張—1563年

上杉と北条の覇権争いにおいても境の城でした。永禄6年(1563)、北条氏康・武田信玄に松山城が包囲され、その救援に間に合わなかった上杉輝虎(謙信)は攻める方向を転じ騎西城を攻略したとされます。

北条氏康没後、天正2年(1574)には謙信が羽生・関宿城援護のため出陣し、古河・栗橋・菖蒲・岩付城とともに騎西城を焼き討ちにしています。



葛飾郷土と天文の博物館『中世・下町再発見』より作成

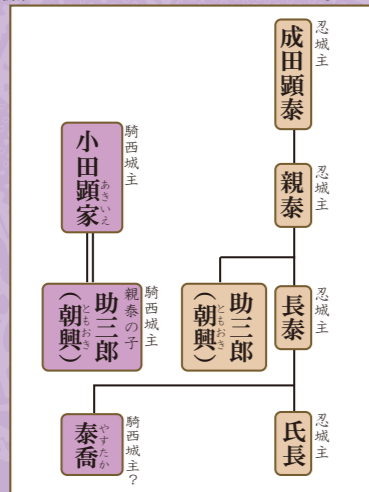
戦国城主

—佐々木・小田・成田—

享徳の乱の際、公方成氏は上杉に対峙するべく古河に野田氏・関宿に薬田氏、そして騎西城に佐々木氏を配置します。

その後小田氏が騎西城に入り、成田氏から顕家の養子となった助三郎は、長尾景虎(謙信)の小田原城攻めに参陣したが離反。敵対した助三郎は、1563年に上杉輝虎(謙信)に攻略されています。

戦国末期の騎西城主は成田泰喬や小田大炊頭の可能性があります。秀吉の関東征伐では、騎西城もいくさに備えたものと思われます。



天下統一と騎西藩

家康の関東入封—1590年

豊臣秀吉に敗れた成田氏長・泰喬は、下野国烏山城に封じられました。

天下統一後、徳川家康が関東に入り騎西城には藩主として三河以来の家臣(松井)松平康重が二万石を賜り藩主となっています。その後、将軍秀忠の信任が厚い大久保忠常やその子忠職が藩主を務めますが、寛永9年(1632)、忠職の代に五万石に加増され美濃の加納城へ転封、騎西城は廃城となり代官所が置かれました。

なお「武州騎西之絵図」は忠常・忠職の頃に描かれたものと思われます。



松平康重肖像(川崎市・光西寺蔵)

いくさ

騎西城は、文献では3度戦場となっています。

城を守る障子堀の底から出土した漆黒の兜(表紙)は、全国唯一の例です。また、兜の前立や馬甲(馬の鎧)は金色に輝き、主の活躍を際立たせたことでしょう。

戦国時代、弓矢に加え新たな武器となった火縄銃。その部品(火縄挟)や100発を超える弾丸が武家屋敷一帯で出土することは、戦闘が広く行われ、激しかったことを物語ります。



前立

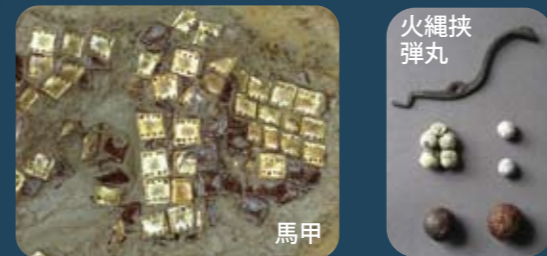


鎧の部品

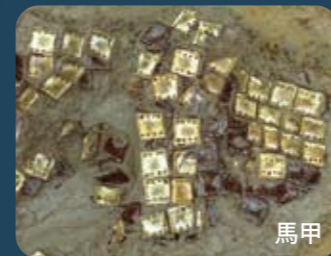
矢じり



刀の部品



火縄挟
弾丸

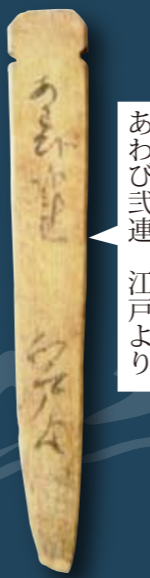


馬甲

もののながれ・なりわい

蛭藻金・露金・切金は小判が現れる前の貨幣です。この金貨が一括出土したのは国内では例がありません。堀底で見つかった袋入の銭貨は支払いのために持ち出したものだったのでしょうか。荷札には「あわびを江戸から送った」という墨書が鮮やかに残っています。

なりわいでは、耕作や紡織の他に本格的な鋳物が生産されていたようです。また城周辺では金や銀を加工した道具(金銀粒子付着土器)が出土しています。



あわび式連
江戸より

荷札



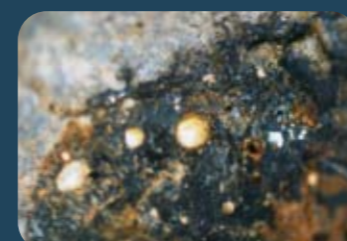
蛭藻金



露金



切金



金粒子付着土器(顕微鏡写真)



袋に入った708枚の銭貨

くらし

豊かなくらしぶりを彷彿させる豊富な出土量です。漆の椀や皿は200点を超え、描かれた文様も亀甲文や鶴丸文、おもだか文など多様です。

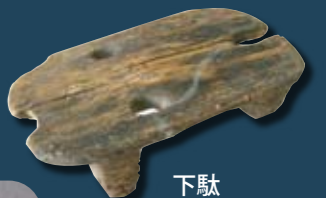
直径8cmの小さな鏡やツゲの櫛など化粧の道具は身だしなみに欠かせません。

下駄にはおまじないでしょうか、表に「二」「×」などの記号が刻まれています。



鏡

櫛



下駄



漆椀など

おもだか文

亀甲文

鶴丸文

白木皿

漆椀

いのり・あそび

蘇民将来符を身に着け、「蘇民将来之子孫也」と名乗ることで厄よけとなりました。「日・月・天」などと書かれた呪符は何を祈ったのでしょうか。

また、騎西城では茶の湯が盛んに行われたようで、天目茶碗や志野・織部・唐津焼の茶碗や向付などの茶陶や湯釜(茶釜)が出土しています。



蘇民将来符

位牌の台

羽子板



呪符

将棋の駒(金将)



茶陶と湯釜